The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	「職人歌合」の詠風 ： 『七十一番職人歌合』の場合
Author(s)	岩崎, 佳枝
Citation	詞林. 1987, 2, p. 40-51
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/67244
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

「職人歌合」の詠風

――『七十一番職人歌合』の場合――

岩崎佳枝

『七十一番職人歌合』は、明応三年（一四九四）成立の『三十二番職人歌合』（注1）の後、約六年後の明応九年（一五〇〇）に制作された（注2）中世最後の最大の「職人歌合」である。登場する職人（詠者）も百四十二人にのぼり、二百八十四首の詠歌が収められている。勿論『東北院職人歌合』『鶴岡放生会職人歌合』『三十二番職人歌合』（注3）同様に、詠者は上層貴族たちであり、職人に詠者を仮託した代詠の歌合である。『七十一番職人歌合』にも当時の公卿歌人・飛鳥井雅康の詠歌二十四首が含まれている（注4）。『三十二番職人歌合』の詠者の一人である三条西実隆も、恐らく当歌合の詠作者の一員であり、画中詞も彼の手に成るものと推測される。

一

職人歌は貴族たちの詠である。彼らが職人になった思いで職人たちの生活や心情を歌に詠み込む。詠歌には当然ながら職人語（主として職種名や道具名・製品名）が挿入されている。俗の世界を俗の語で詠むわけである。しかし与えられた歌題は、貴族たちが好むところの「月」であり、「恋」である。即ち「月」「恋」は主として雅の世界で扱われるテーマである。左右に分かれた詠者たちは、俗なる職人（注5）に対して月・恋という、一見矛盾する歌題のもとに歌を競い合わねばならない。俗の世界をいかに雅の素材で彩るかが、彼らの腕の見せ所となる。「いやし」を「やさし」で包み込むわけである。

では『七十一番職人歌合』の場合、具体的にはいかなる技法が用いられているのであろうか。一般的には、職人語や職人の生活・心情をあらわすいわゆる俗なる語句を、雅び・やさしを引き出すための序詞として用いる、つまり上句にそれを置き、下句の月や恋への思いに移らせる方法である。留意すべきは、逆に下句に職人句を置くと、雅びの世界を奏でる効果は半減する。『七十一番職人歌合』の殆どは前者の技法が採られている。技法は大きく次の三種に分けられる。

A　上句の三句目を「細帯の」「蛤の」「立君の」など、主として体言に格助詞「の」を付けて下句へ続ける。

B　上句の三句目を「太郎鍋」「筑紫針」「鏡磨」など主として体言止めにして下句へ続ける。

C　その他

1イ上句の三句目が「すみかねに」「身の業を」「下枝より」など、主として体言に格助詞「に」「を」「より」が付く。

ロ上句の三句目が「きりかねて」「やみまたば」「いかにして」など、主として用言または助動詞に接続助詞「て」「ば」「して」がつく。

ハ上句の三句目が「もんぜむは」「紙までも」など主として係助詞「は」「も」が付く。

2　上句の三句目が「けり」「なり」などの助動詞や、「かな」「や」「ばや」などの終助詞で切る三句切れ。

3　上句の三句目が用言の終止形や副詞で終わるもの。

『七十一番職人歌合』全歌二百八十四首には、体言に「の」を付して下句へ続けるAが八十五例、三句目を体言止めとするBが八十四例に達し、全体の約三分の二を占めている。しかも、一・二の例外を除き、上句の最後（三句目）には必ず職人語が配されている。歌集や歌合集において、全歌の約三分の二近くをA・Bの技法によって占められるという例は他に見あたらず、これは「職人歌合」、とくに『七十一番職人歌合』のもっとも大きな特徴の一つと言えよう。

A八十五例のうち若干首を挙げよう。（引用歌は群書類従版本による）

・我袖のひるよもしらぬなまかべのよりそふ人のなきもうらめし　（壁塗　二・恋）

・我恋はくさびもさゝぬ小車のめぐり逢べきたのみだになし　（車作　五・恋）

・筆づかにきりつゞめたるさゝ竹の永夜しらず月をみる哉　（筆結　八・月）

・一たきのさも燃えやすき小原木のあかしもはてず入かたの月　（小原女　九・月）

・馬かはふばくらう時の立君の宵暁にかよひなればや　（馬買　一〇・恋）

・人妻にかけし衣の細帯のくけぢもあらば嬉しからまし　（帯売　一四・恋）

・たのまめや人をば独ふせづるのきれぬ契とおもはましかば　（弦売　一六・恋）

・あしざまに取落しつるかはらけのわれてくだけて物おもふ哉　（土器作　一七・恋）

・忘らるゝ我身よいかにならがみの薄き契はむすばざりしを　（紙漉　一九・恋）

・いかけ地のところところのきり金の光ことなる秋の夜の月　（蒔絵師　二七・月）

次にB八四例のうち若干首を挙げる。

・軒あれて古きかぢやの太郎槌ふりさけみれば月のさやけさ
（番匠　一・月）

・逢ことはそれぞとぢめの桜かばかばかりとこそ思はざりしか
（檜物師　五・恋）

・なにしおへば秋のうちにも播磨鍋ふたゝびにるゝ月をみる哉
（鍋売　六・月）

・我恋は忍ぶとすれどさか瓶子口こそつゝめ色に出つゝ
（酒作　六・恋）

・打絶えていとめまばらのあら莚いのねらるべき月の影かは
（莚打　八・恋）

・骨こはき扇の紙の薄そくい思ひもつかぬ人に恋つゝ
（扇売　一二・恋）

・山風の落くる露の古あしだかたはの月は木のま成けり
（足駄作　二二・月）

・いつしかに我にみえじとかくれがさしもへだてぬ心なりしを
（傘張　二二・恋）

・出やらでいとゞ心を筑紫櫛はわけの月に山風もがな
（櫛挽　四二・月）

・独ふすたゝみのうちのかくし針人にしられぬ恋もするかな
（疊刺　四三・恋）

・我恋は心一つにしのぶ縮つみしらすべき便なければ
（綿売　五九・恋）

右の歌にも見られるように、A群に「生壁」「小車」「笹竹」「小原木」「立君」「細帯」「布施弦」「切金」「土器」「奈良紙」、B群には「太郎槌」「桜樺」「播磨鍋」「酒瓶子」「荒莚」「薄続飯」「古足駄」「隠傘」「筑紫櫛」「隠針」「信夫綿」など、上句三句目には必ず職人用語が置かれている。前述のようにこの技法は、上句で職人に関する事象（生活・心情）を詠み、それらが下句の雅び・やさしさを呼び起す序詞的役割を果たすものといえる。

次にその他の技法としてCの例を挙げよう。このグループは、とくに三句目に職人用語を詠み込むということもなく、体言などの下に格助詞・接続助詞・係助詞・終助詞が付くなど詠法はさまざまである。

1イの例

・をしなをす工もいさやすみかねにさげすむ月のかたぶきにけり
（番匠　一・月）

・うらめしや筑摩のなべの逢ことを我にはなどかかさねざるらん
（鍋売　六・恋）

・後しろし峯の紅葉の下枝より色とりいづる夜半の月影
（絵師　二八・月）

ロの例

・しかま川逢瀬もいつとちぎらぬにあながち人の恋しかるらん
（紺掻　四・恋）

・いけはぎの皮かはふ時ながむればあかはだかにもすめる月

哉　（皮買　一〇・月）

・秋さむきねやの扇の風絶て雲の折めの月ぞかくるゝ
（扇売　一三・月）

・恋といふ一もじゆへにいかにしてかきやる文のかず尽すらむ
（葱売　四〇・恋）

・山国のゑせ木のくれはかさなれどきらはるゝみは独こそおれ
（筏士　四二・恋）

ハの例

・恋しさの心ものべぬ独寝は九条むしろもせばからぬかな
（筆結　八・恋）

・すきかへし薄墨染の夕暮もしら紙色に月ぞいでぬる
（紙漉　一九・月）

・独ねの身をもはなたでぬきれこそ我手枕のふしとなりけれ
（念珠挽　三二・恋）

2の例

・引きはへて永き夜ながらながめばや影も白木の弓張の月
（弓造　一六・月）

・水かねやざくろのすます影なれや鏡とみゆる月のおもては
（鏡磨　三三・月）

・心さへ人のけはひにみゆる哉さにづらべにの移りやすさは
（紅粉解　三三・恋）

・眠らねばきやう尺までも無りけりさやけき月を伴道にして
（禅宗　六四・月）

・蓮葉のにごらぬ露にやどるなり是も上品上生の月
（念仏宗　六五・月）

3の例

・さしも我ちぎり置しを今宵又誰とぬものゝいとも恨めし
（縫物師　五一・恋）

・我ながらをよばぬ恋としりながら思よりける心ぶとさよ
（心太売　七一・恋）

・今は我きれはてぬるをさても猶ろくろの縄のひく心かな
（轆轤師　二〇・恋）

『七十一番職人歌合』二八四首中の約三分の二を占めるA及びBの技法は、各番いごとにほぼ平均に散在（一番い四首中約三首）している。それに対し、Cは六一番から六九番（六六番連歌師・早歌唄の二職人歌を除く）までの三二首に圧倒的に多い。A・Bがもっとも少ないこの番いの詠者は宗教者（山伏・持者、祢宜・巫、競馬組・相撲取、禅宗・律家、念仏宗・法花宗、比丘尼・尼衆、山法師・奈良法師、華厳宗・倶舎宗）で占められている。因みに六一番・六二番・六四番・六五番には、一番い四首中三首がC、六七番・六八番・六九番に至っては、一番いすべてCとなる。理由としては、「職人歌合」とはいえ、これら宗教者群の詠歌には伝統的な釈教歌の要素が含まれているからではないか。勅撰和歌集の部立にも釈教歌がある。この小群は職人の立場に立っての代詠歌ではなく、実際に僧籍にあった歌人たちの詠歌とも考えられる。

また『七十一番職人歌合』の詠歌の中には、当時の職人たちが商いの際、店頭や路上での呼び声（職種名・商品名でもある）が挿入されているものもある。

・秋のよも限有けり馬かはふ声すむほどの明方の月
（馬買　一〇・月）

・朝かへる道行ぶりのかはかはふ我逢つると人にかたるな
（皮買　一〇・恋）

・昼なれやよはの月ともいかゞゆわうはゝきの塵も曇なき哉
（硫磺箒売　二一・月）

・暮ごとにざうりやめすといひなして人のあたりに立ならすかな
（草履売　二一・恋）

・月のきる雲の衣をうり物やさふらふといふ人もかはめや
（牙僧　四一・月）

・思ふこと人に伝ふる道ならでおようや有といふはよしなし
（牙僧　四一・恋）

・いつまでか待宵ごとの口づけにあすやあすやといふをたのまむ
（酢造　七一・恋）

右の詠歌には、「馬かはふ」「皮買はふ」「いかゞ、硫磺箒」「売り物や候」「御用や有」「草履や召す」「あ酢や、あ酢や」など、職種名や商品名を一首に織り込み、しかも巧みに月や恋を詠い、雅の世界を表出させている。当「職人歌合」の大きな特徴の一つである。

二

以上、『七十一番職人歌合』の詠歌の特徴と思われるものを述べた。では判詞において、当歌合の判者はいかなる態度で判をなしたであろうか。判者の目、評価の基準等に焦点を当ててみたい。

『七十一番職人歌合』に詠まれている歌には、職人語が用いられているために庶民臭を帯び、一見、狂歌的色彩を呈しているかに見える。しかし詠風の分析からも窺えるように、この歌合は『東北院職人歌合』『鶴岡放生会職人歌合』同様に、雅の文学を意図したことは明らかである。同様に判者たちも「職人歌合」とて特別視せず、あくまで伝統的和歌を批評する目で判をなしている。

まず『東北院職人歌合』「十二番本」では、判者は心・詞ともに正統的な「和歌の道」に従うべきであることを述べ、「俳諧の歌」の姿を嫌い、従来の歌合の作法に遵ずべきことを説いている。

〈十二番本〉

・心詞、艶にしてよくよく和歌の道をしれり。
（盲目　五番・月）

・心詞、艶にして歌の姿をかねたり。
（莚打　七番・恋）

・俳諧の歌の姿にて当世の風情にあらず。

（桂女　十一番・恋）

なお番匠の歌（十二番本・三番、五番本・二番）においても、伝統的歌合論（歌論）にもとづいて傾く月を詠むことを難としている。

すみかねのなほりをたゞすみなれどもかたぶく月にかふばりぞなき　（番匠・月）

（判）

・かたぶく月とよまれたるこそふかき難にて侍れ。月を題にえてはさかりによみべき也。　〈十二番本〉

・かたぶく月とよまれたるいかゞ侍覧。月の歌をばさかりによむべきとぞふるき歌合（注6）にも申たる。〈五番本〉

『鶴岡放生会歌合』の詠者は、「楽人」「舞人」「宿曜師」「算道」「絵師」「綾織」など鶴岡八幡宮に関連深い職人たちであることからも、自ら雅味を帯びる。また「遊君」「相人」「樵人」「筆生」「漁父」とするなど漢名を使用している。この傾向は本文中にも見られ、判詞もおおむね漢文調で、対句形式が散見されるのもこの歌合の特徴の一つである（注7）。

くろかみをやみのうつゝにすきやりて見ぬ面影をうつしかねつゝ　（絵師　五番・恋）

こよひさへいもがこまくらよそにしておほとのゐにやひとりあかさん　（綾織　五番・恋）

〈判詞〉

・左、やみのうつゝは優に侍べし。右はつくろはぬ様にきこえて歌めきたる事なければ、猶左の勝ちにこそ。

『七十一番職人歌合』の場合はどうであろうか。やはり判者は詠風が雅を基調とすることに注目し、「こはきことば」（強詞）、「ただことば」（徒詞）、「いやし」（卑）を嫌い、反対に「やさし」「優」「艶」「寄せ」ある「典拠」のあるを良しとする。

「こはきことば」について言えば、次の詠歌A・B・C・D・Eに対し、

A　骨こはき扇の紙の薄そくい思ひもつかぬ人に恋つゝ　（扇売　一三・恋）

B　我恋は建仁寺なるさうめむの心ぶとくもおもひよるかな　（素麺売　三七・恋）

C　逢事は猶かたければ硯いし金剛しやうもかなはざりけり　（硯士　三九・恋）

D　をしはかるこあてだになし夜引目のいる方暗き月のあたりは　（弓取　四七・月）

E　逢事のじゆくせぬ柿のさねかはごしぶしぶにだに人のこぬかな　（皮籠造　五三・恋）

判者は、

a　道理は立て聞ゆれど五文字誠にこはく侍り…。　（負）

b　第二の句こはし。　（負）

c　ことはりは能聞えたれども第四の句あまりにこはくきこゆ。　（負）

d　詞こはし。げにもつよき弓とりのわざなり。されど月の歌に、いるかたは心なきに似たり。（負）

e　熟といふ詞こはけれど、柿のさね、かはこ、熟しなど縁の言葉にや。（負）

と述べる。即ち、「骨こはき」「建仁寺」「金剛しやう」などの詞は強し故、判定は負となる。また次の詠歌に対し、

a　夕暮の山端みればまつさかやつるつるとこそ月はいでけれ（弦売　一六・月）

b　玉札もばねのけらるゝ荒弓のをしかへしても人ぞ恋しき（弓造　一六・恋）

c　秋うるしぬる夜はいかにわれひきればけめは白き村雲の月（挽入売　一七・月）

d　恋しぬときくきくなをもさまでやと我をへしきに人のいふなる（組師　五一・恋）

e　秋霧は月すむ山のうちこしも雨のたぐひにきらふとぞみる（連歌師　六六・月）

判者は、

a　まつさかやつるとは続きたれど、つるつるの詞たゞ詞也。（負）

b　はねのけらるゝといふ、又たゞことばなり。（負）

c　さることゝは聞ゆるを、はけめと云や、たゞ詞ならん。絶まといふべきを、ひきれに引れていへるにや。（負）

d　詞にへしきといふはたゞ言葉也。されどよくよせたれば猶為持。

e　霧は降物に打越を嫌、新式の心、可然は侍れど、山の打越只詞にや。（持）

と言い、「つるつる」「はねのけらるゝ」「はけめ」「へしき」「山のうちこし」の語を「ただことば」であるとして、これらの詠歌に負の判定をしている。「いやし」に対しても同様で、次の歌に対し、

A　かつら鮎とりてうるかとやみまたば月の価はなく成ぬべし（魚売　一五・月）

B　いかにしてさのみたつ名を大鼓かしらうつまで恋しかるらん（女盲　二五・恋）

C　毛がはりをとりあはせたる鞠かはの思もあはぬ人に恋つゝ（沓造　二九・恋）

D　はいらふのたらざりけるか我に人とろぼされしとおもひあはねば（銀細工　三一・恋）

恋すとて青みはてたるひたちがねいつ色よしと人にみえまし（薄打　三一・恋）

判者は、

a　あたひといふ詞、歌にも侍らめど何とやらん賤しくきこゆ。（負）

b　大つゞみにかしらうつといふこと侍にや、されどいやしく聞ゆればまけ侍べし。（負）

c　当道さることも侍らめども、歌がらいやし。（負）

d　左右ともに歌ざまいやし。

と、歌柄・歌ざまの「卑し」「賤し」を排除する。逆に職人用語を詠み込みながらも、「優」「艶」なる歌

A　秋さむき深山の里にたくほだの永き夜尽ぬ月影も哉
（山人　一一・月）

B　昼なれやよはの月ともいかゞゆわうはゝきの塵も曇なき哉
（硫磺箒売　二一・月）

C　月に寝ぬとうじみ売の身の業を誰聞しらぬいびきとかいふ
（燈心売　四〇・月）

D　いつまでか侍宵ごとの口づけにあすやあすやといふをたのまむ
（心太売　七一・恋）

に対し判者は、

a　ほだのながくつきぬに月を思よせたる、いうに聞ゆ。
（持）

b　ひるなれやとて、よはともいかゞゆわう箒の塵も曇らぬなど、長々と言下せる。優ならざるにあらず、同科にや。
（持）

c　心詞能調ふりて〈略〉此燈心によく引出られて艶に聞え侍。

d　酢つくる人は、あすやあすやといひて祝ごとにするといへるをよめるにや。えんにきこゆ。
（持）

と評する。そして「やさし」を基調とするもの、「よせある」（注8）歌を勝ちとする。

A　故郷の壁のくづれの月影はぬるよなくてぞみるべかりける
（壁塗　二・月）

B　たつる茶のあはれ消とも逢ことの一せにかふる命ならばや
（一服一銭　二四・恋）

C　くらきよに冠のえいやとられけん人にしられぬ我思かな
（冠師　二八・恋）

D　繰かへし悔しき物を片思おもひの玉の数かぎりなく
（玉磨　三九・恋）

E　夕まぐれ山かた近き三日月のまがりながらに入ぬべきかな
（鞍細工　四五・月）

F　よそえてもげにぞ恋しき人まねのおほひかづらの女すがたを
（田楽　五〇・恋）

G　恋られてむくひやするとゑめい冠者うつくしげなる人とみえばや
（猿楽　五〇・恋）

H　夕まどひする人もなしかなうすの月の夜声のかしがましさに
（薫物売　六〇・月）

ふ　吹たてし河よりをちの笛の音のゆかしとせめて聞人もがな
（楽人　七〇・恋）

ふ　袖ふらば涙やみえんから人の立まふこともいかゞとぞ思
（舞人　七〇・恋）

これらの歌に対して判詞は、

a　壁の崩といひてぬるよなく月をみるいとやさし。（勝）

b　一銭をひとせにとなずらへたる、いとやさしくきこゆ。

c　故事を思てしかもその心あり、いとやさし。　（勝）

d　左は首尾やさしくよめり。　（勝）

e　右はことばつゞきやさし。　（勝）

f　左右ともに我道のすがたをかりて恋をよせたるこころばせやさし。　（持）

g　月の夜ごゑによそへられてやさしく聞ゆ。　（勝）

h　左右ともに、かのにほふ宮の宇治を思よせ、光君のそで打振し事になずらへておもひの色にいへり。ともにやさしく聞ゆ。　（持）

という。

「寄せ」ある歌には、

A　池水の月影みればしろばくの泥になりても光やはけつ　（薄打　三一・月）

B　月見つゝいたづらぶしのなきまゝによの程造る竹かはごを哉　（皮籠造　五三・月）

とあり、判詞に、

a　始中終、よくかなへり。でいにけつなど尤よせあり。　（勝）

b　ふし、よなど竹かはごによせあり。すこしまさるべくや。　（勝）

とある。（他一〇・五七・六九）（注9）

また、『七十一番職人歌合』には、典拠があると見られる歌も多い。判定において伝統的立場を重んじる判者は、勿論これらの歌を勝ちとする。例えば次のA・B・Cの歌の判詞に指摘されるように、「蛤売」の歌は、新古今和歌集秋歌上四〇〇「忘れじななにはの秋の夜はの空こと浦に住む月はみるとも」を踏まえる。また「翠簾屋」の歌は、『白氏文集』巻一六（注10）や『枕草子』二九九段（注10）に、豆腐売りの歌は、光源氏を想定していよう。

A　こと浦の月もなにわの蛤の貝ひろふまでえやはすみける　（蛤売　一五・月）

本歌にすがりてしかも月を賞めたる…。　（勝）

B　雪とみて巻あぐるかな玉すだれいとさやかなる秋の夜の月　（翠簾屋　二三・月）

かの雪の朝の簾を月に引きかけてよむ。　（勝）

C　恋すれば苦しかりけりうぢどうふまめ人の名をいかでとらまし　（豆腐売　三七・月）

かの源氏の夕霧の大将はまことしきによりてまめ人の大将といへり。　（勝）

D　月にねぬとうじみ売の身の業を誰聞しらぬいびきとかい

ふ　（燈心売　四〇・月）

心詞能調ふりて、殊に源氏物語槿の巻にや、程もなくいびきとか聞しらぬ音すればといへる詞も…。　（勝）

E　名にしおはゞ我こそはみめ笠縫のうら淋しかる秋の夜の

月　（笠縫　四四・月）

まことに作者の名におふ浦の月より所あるか。（勝）

F　住吉の入江の月や故郷の姑蘇城外のあきのおもかげ

（暮露　四六・月）

…他人のをよばざる風体、かの仲麿が三笠の山の月にも澄増りてこそ侍らめ。（注11）（勝）

G　いとふなよかよふ心のむまひじり人の聞べきあの音もなし

（暮露　四六・恋）

あの音せずゆかん駒もがといへる万葉の古風もよりきなして神妙に侍り。（注12）（勝）

H　月にだに勧学院のもんぜむは立入道の人ぞ稀なる

（文者　四七・月）

文選を門前によせたるも…おもしろく聞ゆ。（勝）

I　くせ舞の月にはつらき小倉山その名かくれぬ秋のもなかを

（曲舞々　四八・月）

当世曲舞に、月にはつらき小倉山、その名はかくれざるけりといふ音頭を思よせたるにや。（勝）

J　車にて袖打ふりしまひ女かゝる恋すと人はしりきや

（曲舞々　四八・恋）

袖うち振しといひて、しりきやといひとぢめたるは彼光源氏のうたを思へる歟。（注13）

K　往来のさはりもぞする先人をくわん音せいし来迎も哉

（念仏宗　六五・恋）

一目みてわすられざりしおもかげは十羅刹女もかくやとぞ思ふ　（法花宗　六五・恋）

ともに観音勢至を使とし、十羅せつ女を思懸たり。且恐なきにあらず。光源氏の物語にも、法けだちくすしからむと申めり。（注14）

L　諸共に月にうたはんげにやさば今はた誰もさぞ覚たる

（早歌唄　六六・月）

げにや娑婆の秘曲、其興侍…。（持）

M　入がたの月にまはばや陵王の日影をかへすばちの手づかひ

（舞人　七〇・月）

入日に月を准らへ、ばちにて招くこと、かの宇治の宮のこと思よせたるにや。（勝）

N　吹たてし河よりをちの笛の音のゆかしとせめて聞人もがな

（楽人　七〇・恋）

袖ふらば涙やみえんから人の立まふこともいかゞとぞ思ふ

（楽人　七〇・恋）

左右ともにかのにほふの宮の宇治を思よせ、光君のそで打振し事になずらへて、おもひの色をいへり。（持）

最後に、伝統的な情緒を重んじ、戯れ歌なるものを排除する判者の態度を知るのに便宜な歌を挙げておこう。一つは四五番の「鞘巻切」と「鞍細工」の月と恋の歌である。

・浮雲の晴もやらねばさや巻の引こみがちにみゆる月哉

（左・月）

・夕まぐれ山かた近き三日月のまがりながらに入ぬべきかな　（右・月）

左は、いさゝかざれ歌に似たり。右は、ことばつゞきやさし。可為勝。

・我恋はまちさや巻のやれすのこぬる人のこぬ身をいかにせん　（左・恋）

・いかにしてまづ人ぐちに乗ぬらんしらほね鞍のぬるよなき身に　（右・恋）

左右、たくみにして歌ざま猶狂歌なり。ともにうるしほしげなり。可為持歟。

月の歌では、左をいささか戯れ歌であるとする。「さや巻の引こみがちに」に見える月としたところが戯歌的であるというのであろう。それに対し右の「夕まぐれ山かた近き三日月」との歌い出しを言葉続きがやさしとして勝ちとし、恋の歌は狂歌の歌ざまであると批評する。「我恋はまちさや巻のやれすのこ」「いかにしてまづ人ぐちに乗ぬらん」など、確かに狂歌的である。「うるしほしげなり」とは、修正が必要そうに見えるという意である。「鞘巻切」と「鞍細工」がともに漆を用いる細工師であることによる冗談である。ともあれ、判者たちはこの番いからも、戯歌・狂歌的なるものを「戯人歌合」に庶幾していなかったことが知られよう。

六番は「鍋売」と「酒作」である。恋の歌とその判詞は、

・うらめしや筑摩のなべの逢ことを我にはなどかかさねざるらん　（左・恋）

・我恋は忍ぶとすれどさか瓶子口こそつゝめ色に出つゝ　（右・恋）

左歌、誠に撰集などに入たりとも恥ずや侍らん。右は、いさゝかたはぶれ歌なり。仍左可勝。

とある。「鍋売」の歌は、撰集などに入っても恥かしくないという。「酒作」の歌は戯れ歌故、当然鍋売の歌を勝ちとする。このように判者たちは、戯歌・狂歌的なるものを敢て採択せず、勅撰和歌集入集にも価する歌を良しとしている。

「職人歌合」とくに『七十一番職人歌合』は戯れ歌であり、狂歌に属すると考えられているかも知れない。詠者の中には戯歌的意識をもつ者もいたであろうが、しかしそれはごく僅かで、殊に判者にあっては完全に伝統的な正統和歌であるべきだとの考えをもっていたのである。上句の最後に職種名や職品名などを盛り込み、縁語・懸詞を駆使して下句へ続かせ、全体としては「雅」の意識を忘れてはいない。しかも職人歌合の生活・心情を鮮かに詠いあげ、彼らの生の世界を生き生きと蘇らせてくれるのである。『七十一番職人歌合』は中世後期の歌壇を彩どる異色の歌合の一つといえよう。

注1拙著『職人歌合の研究』――『三十二番職人歌合絵』の成

立と背景 ― （歌合絵研究会　昭五六・三）

注2拙稿『七十一番職人歌合』成立年時考（「文学・語学」第九六号　昭五八・一）

注3山本唯一氏稿『鶴岡放生会職人歌合』成立年時攷（「文芸論叢」第一七号　昭五六・九）　拙稿「職人歌合」の詠者たち ― 『三十二番職人歌合』の場合 ― （「語文」第四一輯　昭五八・五）

注4拙稿「職人歌合」と飛鳥井雅康 ― 『七十一番職人歌合』の一詠者（「文学・語学」第一〇六号　昭六〇・七）

注5例えば「職人歌合」には次のようにある。

東北院の念仏に九重の人人男女たかきもいやしきもこぞり侍しに（『東北院』序文）

我等三十余人、いやしき身しな同じきものから（『三十二番』序文）

かづら捻といへば、賤きやうなれど…（『三十二番』二一）

いやしきあまのすさみにも…（『三十二番』二一）

注6大治三年（一二二六）『永縁奈良房歌合』参照

注7例えば『鶴岡放生会職人歌合』序文には、「南にのぞめば海浜茫々たり。奏甸の一千余里思やられ、北にかへり見れば社檀重々として、漢家の三十六宮にことならず」とある。

注8『八雲口伝』「歌にはよせあるがよき事」参照。

注9一〇番「むまかはふ」の恋歌（馬かはふばくらう時の立君の宵暁にかよひなればや）の判詞に「身におふ恋とおぼえて立君に寄たり、心あるにゝたり」　六九番「華厳宗」の恋歌（思ふ人あはれ茶ずきに成りたらば摘しらすべき時もあらまし）の判詞に「恋に茶のよせを求侍ること、才学少し」

注10『白氏文集』巻一六「日高睡足猶慵起　小閣重衾不怕寒　遺愛寺鐘欹枕聴　香炉峰雪撥簾看」『枕草子』二二九段「雪のいと高う降りたるを、例ならず御格子まゐりて、炭櫃に火おこして、物語などして集りさぶらふに、「少納言よ、香爐峯の雪いかならん」と仰せらるれば、御格子あげさせて、御簾を高くあげたれば、わらはせ給ふ」

注11『古今集』四〇六「もろこしにて月を見てよみける　あまの原ふりさけみればかすがなるみかさの山にいでし月かも」（安倍仲麿）

注12『万葉集』三三八七「足の音せず行かむ駒もが葛飾の真間の継橋やまず通はむ」

注13『源氏物語』紅葉賀「物思ふに立ち舞ふべくも非ぬ身の袖打振りし心知りきや」（物語歌集八四四）

注14『源氏物語』帚木「吉祥天女を思ひかけむとすれば、ほうけづき、くすしからむこそ、又わびしかりぬべけれ」

（本学研究生）